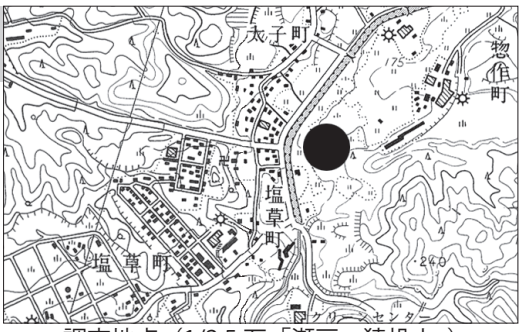
惣作（そうさく）・鐘場（かねば）遺跡

所　在　地　瀬戸市惣作町、鐘場町
調査理由　県道瀬戸設楽線建設
調査期間　平成 12 年 12 月～平成 13 年 3 月
調　査　積　4,400 ㎡
担　当　者　北村和宏・宇佐見 守・鈴木達也・早野浩二

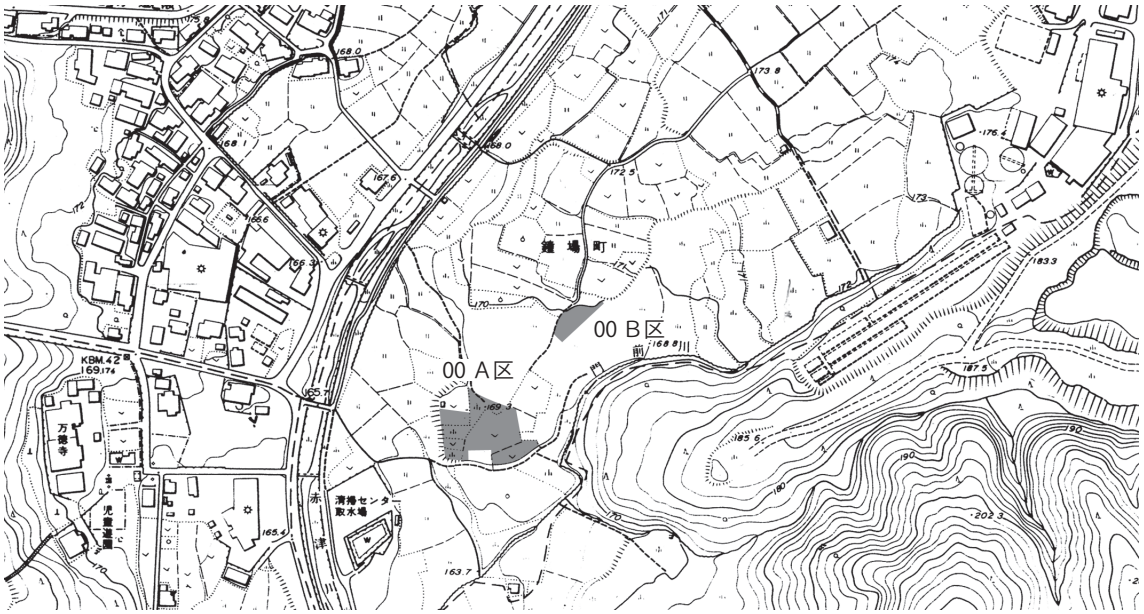


調査地点（1/2.5 万「瀬戸・猿投山」）

調査の経過　調査は県道瀬戸設楽線建設に先立つもので、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、今年度より発掘調査を実施している。平成 12 年度は平成 12 年 12 月から平成 13 年 3 月にかけてＡ区 3,000 ㎡、Ｂ区 1,300 ㎡、範囲確認 100 ㎡、計 4,400 ㎡の発掘調査を実施した。

立地と環境　惣作・鐘場遺跡は瀬戸市惣作町、鐘場町に所在し、矢田川の支流赤津川の左岸に形成された標高 170 m前後の段丘上に立地する。遺跡の周囲には、太子縄文遺跡、太子遺跡が南接するほか、約 1 ㎞北東に瓶子窯跡、巡間Ｅ窯跡、約 1.5 ㎞北東には本センターが発掘調査を実施した八王子、長谷口遺跡がある。

調査の概要　今年度の調査の結果、Ａ区において後期旧石器時代終末～縄文時代草創期、縄文時代中期、弥生時代終末～古墳時代前期、飛鳥時代、平安時代前期、中世、近世と各時期の遺構・遺物が確認され、本遺跡が断絶をともないつつも長期間にかけて継続する複合遺跡であることが明らかとなった。ただし、耕起にともなう削平によって遺構の残存は必ずしも良好でなく、Ａ区西半部では遺構はほとんど確認されていない。一方、Ｂ区は調査条件の制約から全面的な調査が不能で、試掘坑による部分的な調査にとどめざるをえなかった。以下に調査の内容を概ね把握しえたＡ区についてその成果を概述する。



調査区配置図（1：5,000）

旧石器～縄文時代　A区の南端は段丘面が落ち込み、地山となる砂礫層の上面に黄灰色土が堆積する。後期旧石器時代終末～縄文時代草創期に相当する石器類はこの堆積土中、あるいはその直上から出土した。出土した石器類には有舌尖頭器1点、数点の掻器などの製品も含まれ、上層の堆積土中からも木葉形尖頭器の基部片などが出土している。

縄文時代中期　縄文時代中期の遺構としては竪穴住居3棟（ＳＢ07、09、10）と、土坑群を検出した。これらの遺構は段丘面の南端付近に展開する。ＳＢ07は長径5m、短径4mの西側に膨らむ不整の円形を呈し、中央やや東寄りに石囲炉を付設する。石囲炉は長辺1.2m、短辺1.0m、やや胴張りの長方形で、炉の上面は顕著に被熱していた。炉の中央には径25㎝の小ピットをともなう。ＳＢ07の炉内や柱穴内からは中期後半に相当する深鉢が数個体出土している。ＳＢ09、10は円形にめぐる柱穴や壁溝を確認したにすぎないものの、ＳＢ09では浅い掘り込みをともなう地床炉が確認された。土坑群は竪穴住居の周囲に散在し、なかには掘形が明確な袋状を呈するものも認められる。遺物は縄文土器のほか、石鏃、石錘、石斧などの石器が出土しており、とくにA区南東の段丘斜面には剥片が集中していた。石材は黒曜石とチャートが主体となる。

弥生～古墳時代　A区ではガラス小玉が2点出土したことから、調査区周辺が弥生時代終末～古墳時代前期の墓域として利用されていた可能性がある。A区北東で検出した方形にめぐる溝ＳＤ05を方形周溝墓との見方をすれば、一辺が7m、一辺の溝の中央が途切れる平面形として復原することも可能であると思われる。ＳＤ05の周辺ではわずかながら土器も出土している。

飛鳥時代　飛鳥時代の遺構としてはA区北東部で検出された竪穴住居群（ＳＢ01～ＳＢ06）がある。竪穴住居から遺物はほとんど出土しないが、中世の溝に先行すること、多くが竈を付設すること、柱穴の一つからほぼ完形の須恵器蓋と土師器甕が出土したことから、該期の遺構とした。

平安時代　平安時代前期の遺構として竪穴住居1棟（ＳＢ08）を段丘斜面で検出した。ＳＢ08に付設された竈の残存はきわめて良好で、天井の一部、煙道、石製支脚が確認できた。ＳＢ08では、住居の床面付近から数個体の須恵器椀、竈から灰釉陶器皿片、土師器甕が出土した。

中世・近世　中世の遺物は、段丘斜面の整地層を中心に山茶椀や古瀬戸製品など、ややまとまった出土をみるものの、検出される中世の遺構はごくわずかにとどまる。また、近世の遺構として、段丘斜面の整地層を掘り込む排水溝（ＳＤ01）、甕埋設土坑など、耕作に関連する遺構が検出された。ＳＤ01は排水溝と考えられる溝で、瀬戸窯産陶器半胴甕（筒形）を確認しただけで約13個体、横位に埋設していた。

ま と め　遺構・遺物が比較的希薄で、断片的な情報に頼らざるをえないものの、今年度の発掘調査によって、遺跡の具体像を一定程度明らかにできたものと思われる。

後期旧石器時代終末～縄文時代草創期の石器群は生活面や遺構などを伴なわないものの、比較的安定した層位で出土することから、その資料的価値は評価されよう。また、縄文時代中期の遺構群は当地域における縄文時代集落の景観復原に貴重かつ有意な情報を提供するものと思われる。断定的ではないものの、弥生時代終末～古墳時代前期の墓域に関連する遺構・遺物は当地域においてはまったくの空白時期に相当するものであるだけに、今後の調査の進展には期待が寄せられよう。（早野浩二）

A区全景

A区中央

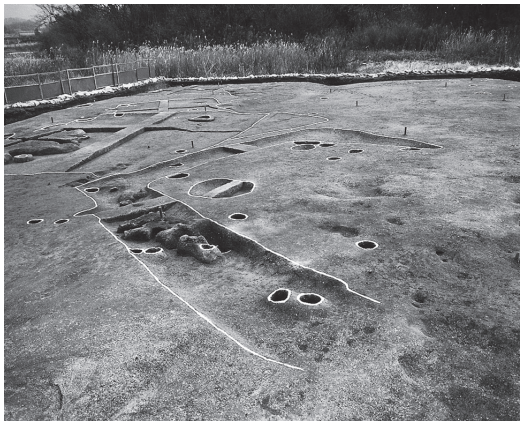
有舌尖頭器出土状況

ＳＢ 07

ＳＢ 07 石囲炉

ＳＢ 07 石囲炉出土縄文土器

ＳＢ 09



ＳＤ 05（方形周溝墓？）

飛鳥時代竪穴住居群

ＳＢ 08 竈

排水溝（ＳＤ 01）